言語障害児の指導

親の会の原点を求めて

—20年をふりかえって—

両親指導の手引き書

全国言語障害児をもつ親の会

言語障害児のために

言語障害児教育のスタート・人々の関わり

司会：平岡事務局長も本調子ではないので、ここを会場にさせていただきました。平岡さんご挨拶をどうぞ。

平岡：本日はお忙しいところ有難うございました。遠いところから神山先生や内須川先生に御足労頂きまして、本当に感謝申しあげます。半年も長いこと寝こんでしまいましたものですから、世の中に疎くなって、前のことを忘れてしまったみたいで、本当に困っているわけですけども、今年で親の会が発足して二十年になるので、二十年を振返っていろいろなことをご発言頂き、将来に向って何かいいご提案でもあれば、大変有難いと思います、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：二十年記念ということから、皆さんに改めて、会の発足から現状へ、そして未来を見通したお話しをしていただけたらありがたいと思います。

神山：私の場合、私自身が吃音の子どもであったし、親父がそれを非常に心配して、あちこち私をひっぱって行ってくれたのです。私が留学の間に東京の言語障害児を持つ親の会の結成とか行木先生大熊先生の援助を得ながら、東京にそういう会を作らせて頂いて、私が留学から帰って来るのを心待ちにしていたわけですが、私が帰らないうちに親が亡くなって、親の会の方々にお出で頂いたりしまして、本当に有難うございました。

それから私が帰ってきて国立の聴力言語障害センターの方で田口恒夫先生の後をお受けしてやらせて頂いた、平岡局長憶えておいでですか。あの頃文部省の動きと厚生省の動きがギクシャクしていた。私個人としては親の会の方々、平井昌夫会長と親しくしていただきながら、厚生省に勤めているので、あまりそう動きができないような難しいところにおりました。ちょっと困ったこともないではないですが、まあいずれにしろそうやっておもてで親の会の方々が頑張って下さっているんで、非常に心強く思っています。

司会：神山先生のお父さんを通して親の会との関わりがあったわけですね。

平岡：もともと、厚生省の黒木局長さんが、言語治療を看ご婦養成の場でやろうということだったのですが、たまたま、田口先生がアメリカから帰られて、教育界でやるものだということか、はっきりしたのです。それに、息子が千葉の院内小学校で世話になったいきさつがありますので、折角、厚生省と手を結んだのに文部省の方へ変更したわけです。でも、厚生省は、言語障害といえば、吃音と口蓋裂だけを認めていたんです。従って文部省と付き合いだしたことが、まんざら悪いことではなかったんだなという気がします。

司会：内須川先生そのころは

内須川：僕の場合、障害にぶつかるもとと言うのは何にもない。人の性格というものに興味をもっている所へ神山君と出会った。昔のことを話すうちに、お互い士官学校へ行ったことがあるということから、彼が吃音をもち出した。吃音にふれるに及んでだんだん深入りしたというかな。東京大学の中に吃音研究会を作ろうという彼の計画に僕も入った。言語障害について集りがあると、国語教育の平井昌夫先生や三木安正先生を通じて、田口先生や大熊先生とも知り合えたのです。昭和三十年の頃だったね。

神山：平井先生が委員長で、文部省の調査にも関わったし。

内須川：院内小で始まったのが三十四年でしょう。僕等の吃音研究会と国語教育から言語障害に入った流れが合流した形になったのでしょうね。千葉とはかなり関わりをもったように思います。平井先生とか親の会の方ともずいぶんつき合いましたね。

平岡：市川でよくお会いしましたね。

内須川：三十八年十月に特殊教育研究施設の前身ができ、学芸大学の言語障害研究室ができていったんですね。

私がそこに入ったから私のやり方は研究が中心です。神山君が一人で金を集め、人を集め、僕はただ研究をやって……。

四十年の頃、千葉でシンポジウムが開かれたことがありましたね。

司会：文部省の実験学校の発表の日でした。

内須川：その時、平井先生は目の前の子どもを救うのが一番大事とおっしゃった。私はそうじゃなくて研究が最初だと主張した。今でも変らないけど。親の会に直接タッチしたのではないのですが、わきで見ていて、運動のスローガンの推移を調べてみておもしろいと思います。始めのころは、とにかく子どもを何とかしたいという要求が強いわけで、教室を増やせ、設備を作れというのが最初の動きのように思うんです。

その内段々先生を養成しろということが出てきてそれに伴なう、様々な問題を掲げるようになっていった。

盛：私も学生の頃に院内小を知り興味をもったんです。幸い千葉に就職もきまった、というのがきっかけで言語障害児とつき合うことになりました。夏休みに講習会で勉強する位しか研究の機会はありませんでしたが。

それから暫くしてテレビに出るようになったり、PRがなされて行って、そして千葉に全国から引っ越していましたね、私が持った子供で遠いのは釧路から来ていた渡辺君、なんかそうなんですけど全国から来たお母さん達が地元に帰って、その地元で作らなければいけないというような、そういう熱気のあった時代ですね。

そういう中で全国の大会をやろうというので、三十八年でしたか。

平岡：一番先にやったのは、三十九年上野の文化会館で。

継承をスムースにする工夫が必要

丸山：親の本当の気もちが、われわれ教員にプラスになる面があるんじゃないかと思うんです。

だから親の会の全国大会で、やはり耳を傾むけて聞いてみると、親の切なる願いというのが非常に分かるような気がするんですね。

そういう意味ではこれからの言語障害児を持つ親の会というのは、作るものからは離れても、子供を一緒に見ていこうという面で、先が開らけていけばいいんじゃないかという気を持っているんですけどね。

中央に出ますと、何時も平岡局長あり、行木さんあり、斉藤さん、小林さんと懐しい顔が見られるけれど、地元の方では出入りがはげしくて一旦卒業するとパッと切れるんです。

結局行政の担当官が、頻繁に変るし校長先生が変るし、言語の先生方自体も、七年以上は駄目とか、三年になったら変るとかいう規則が、特殊学級なら例外ですといってくれないわけでしょう。

そうすると絶えず同じ事の繰り返えしをしなければいけないわけですね。

ところが親の会のリーダーも始終変るわけでしょう。

だからだんだん見えなくなっちゃいますね。

平岡：誰かが残ってやらないと、駄目じゃないかという気がする。そうかといって私みたいに二十年もやっているのは長すぎますけどね。

内須川：一番大事なのは古い人が、その次ぎの人を入れて、受け継いでいくようなシステムを作らないと繋らない、これを何とかやって欲しいと思うんですね。あるところは特別だというところもあるんですよ。

そういうところはだんだん年配の人が出ていくでしょう、そうすると、下の人を養成するんですよ、その代りペアーを組ませてね、そしてだんだん下の人を作っていくという、その繋りが切れてしまうとね、駄目だ。

平岡：そういうことを学校の先生さえもなかなか。教室があって繋っていく筈なのに、なかなかそれが出き難いですからね。親御さんなんかもっとでき難いですね。

盛：学校の先生もね、川崎なんかは四校あって、一つの学校に三人ないし四人いるでしょう。古いのと新しいのが大体ペアーでおかれていますから、そういう意味では引次ぎはある程度は出きていっているし、月に一回は合同ケース会議で、全体が集まっての研修会をやっていますから、誰が何を考えてどんなことをしているかということは、ある程度全市的に分っているんですね。

斉藤：実際問題で考えても、力が親の会にあるんですよ。言葉の教室の先生の上に校長がいるでしょう、下からいくら訴えても校長が変ったりしないんですよ。上から何をやっているんだと言われるから、動くんですよ、その力を与えるのは親の会ですよ。

親の会が県議会なり審議会を動かせば、行政担当というのはじっとしていないんですよ、一番恐いんですよ。

そういう意味で力がある。ところが下から行政に言ったって突き上げたって全然変りませんよ。

平岡：親の会のいいところというのは、そこしかないんですよね、他に何もないんですから、それをやらないというのは親の会なんてないのと同じです。

盛：親は一番無手勝流みたいでね。

平岡：意外と勝手を言っても怒られませんしね。その為に親の会を作った筈なのにね。それに親の心のよりどころなのに。

内須川：親の会の中で、先輩のお母さんと、そうでないお母さんが話をするというのでも随分救われると思う。

幼児問題

平岡：ところが最近幼児のお母さんは学校に入れてくれないんですよ。

内須川：幼児を切り離す傾向にあるからね。困るな、それは…。

平岡：早期発見、早期治療と親が言っているんだから、先生が見てくれれば一番有難いです。ところがうちは学校だから満六才からくるところだ…。そういうことになるから難しい。だから紹介し難い。

内須川：でも親の会はそういう必要はないね。親の会は幼児を含めたって会は出きる筈だから。

平岡：親の会は幼児があった方がいいんですよ。

内須川：そうだから、そういうのを作ったらどうですか。幼児を含めて全部親の会に…

平岡：ところが全国親の会に直に申しこんでくるのではないから。地域地域の学校が基盤になって、親の会を結成して全国に上ってくるわけでしょう。ですから非常にそれが困っている。

内須川：そうかと言って僕等のところに相談に来られても困っちゃうね。

丸山：幼稚園にことばの教室を作ってもらった日立市では、幼児が早くから相談にのってもらえますが、管理上の問題で難かしいことがたくさんあります。

親の会の力

斉藤：親の会があることによって行政にということがありましたけど、確に行政としては教室に対しては親の会に気にかけていろいろなことで面倒を見ていることは確なんですね。ですから、あるとないとでは相当違うということは確です。

親の会ができていても、無くなっている所では、先生の数が減ったり、今まで幼児を扱かっていたところが、扱わなくなって来たりすることが事実でてきています。ですから親の会があるということは行政に対しては相当の力があるということが考えられます。

できることならたしかに情熱を持つということは大変だと思いますが、そういう考えのもとに、教室のあるところとは言わず、必要なところは親の会がなければ駄目だと理解をしていますが…。

行木：先だって、秋田の辻会長さんがおっしゃったことばですが、秋田県として華々しい活動は何もできない。メンバーが入れ替っているけれども、事務局長が残っていて、会長がずっと昔からやっているわけですね。たった二人になっても言語障害児を持つ親の会の旗は絶対に下げない、そこにあることが一つの運動なんだと、おっしゃっていました。成程人数じゃないんだということをしみじみ思いましたけど。

そういう意気込みでやっていかなければいけないでしょうね。

斉藤：先程平岡さんがおっしゃったように昔のいきさつが分っているわけですね。結局行政の方が変っても、私どもがいることによって昔はこうだった、こういうことをやったんでこうなったと、説明が出きるわけですね。新しくおいでになった指導主事さんなんかには、こういうことをやったんですよ、ああそうですか、持ち帰って、応分の動きをして下さるというのはあるということです。やはり旗を掲げているだけで、違うということは確だと思います。

盛：私なんか実際に仕事をしていて、院内にいたころや川崎にいたころは、親が確に自分の子供のことで夢中だったんだけれども、物凄くエネルギーがあったような気がする。例えば来ても、断わると帰りには飛びこむんじゃないかというくらい子供に情熱を持って子供を愛しているというのが、ビンビン伝わってくるような、そういう親が何にも言わなくても、こっちが一生懸命やらなくてはと、その人に触れるだけでお尻を叩かれるような、感じの親が凄く多かった。

リードできる指導力のある先生が必要

司会：親の気質が変化してきているというお話でしたが、先生方の気質との関係はどうでしょうか。

内須川：今、親の指導のチャンスというのが、段々なくなりつつある。それでキャンプみたいな形で指導するというのが、アメリカでもそうですね。

アメリカの場合は六週間くらい、夏休みを使うんです。これが親の指導の救いになっている。

子供の問題というのは親の問題だから、親の指導をしないと効果が上がらないですよ。だから、時代が悪い方に動いているんですよ。教育も落ちこんでいるでしょう。だからこういう風になってきた。こういう中で余程親御

さんを含めて人間教育をしなければ駄目だね、その為には強力な指導性がいるんですよ。

指導力がないとどうにもならないんで、それをつけないと駄目。指導力をつけるといっても若い先生がすぐにっと言うわけにはいかないでしょう。そこで困っちゃうね。

斉藤：今親の勉強会が知識一辺倒になっているということもありまして、私勉強会は、先生と親が対等に話をするということでやっているんですけど、できないですね。

金田：本当は母親教室がちゃんとあるといい。私なんか親の会に対して、目覚させられたのはいい先生と巡り合えたからだと思うんですね。斉藤先生とか藤崎先生とか、全然知らなかったんですけど、私の子供が指導を受けました時には、親は親、子供は子供で別々に母親教室で、親の胸の中にあるものを全部はき出させて下さいました。

日曜日でも何でも出てきて、親の会に参加して下さいましたし、一緒にハイキングに行ったりとかね、そういう先生の熱心さに打たれて、先生へのお礼をどうすればいいのか、これは先生に御恩返しをしようと思ったら、先生方がやり安い状況を作るのが、感謝の気持を現すことなんじゃないかというので親の会を始めた最初だったと思うんです。

やはり先生方が親の会はどうして必要なのか、子供達がどういう状況で困っていて、どういう風にすればいいのかということを親にもっとどんどん言って下さればそれを受けとめる、親とが巧く気持が合ったらいい活動が出きるんじゃないかと思います。だんだんそれがなくなって来ていますね。

盛：ある意味では先生は困っていないです。（笑）

斉藤：いや、困る状況に自分をおいてないとということなんでしょうね。

金田：困っているんじゃなくて、困る方へ目をむけないのでしょうね。何か真剣に考えれば次々に壁にぶつかるはずですね。

平岡：子どもの将来を見通して指導してくれることが大切なので、そのために親と先生が協力しなければいけないですよね。

丸山：親の会の人たちが動いてくれて教室ができたわけですので、私たちは（教員として）言語治療教育について正しい理解が母学級の担任にもってもらえるように、母親たちの困っていることをうまく理解してもらえるように伝えなければならないと思っています。それに、校

長先生や教頭先生の考え方ひとつで通級の方法に影響が出てきますから、私たちがわかってもらえるように働きかけていく役割をもたなければ申しわけないと思っています。黙っていても後でわかってくれる校長先生も多いわけです。学級担任の先生や教頭先生、教務の先生方に理解していただく研修会をもたないといけないと思うんです。これを怠ると、いくらおかあさんたちとうまく心が通じていてもうまくないと思いますし、子どもさんやおかあさんに申しわけないと思います。

司会：こういうお話を伺いますと、ことばの教室の先生のやることは実にたくさんありますね。それに親の会としての活動でもね。

竹村：松戸は幸せなことに、担任が親の会のことを心配することはないのです。伝承が実にうまく行っているんですよ。ふだん母親教室では、長く続いている会員が後輩にかつて悩んだことを話してくれたり、役員は経験のある人が新人とチームを組んで、という方法が根づいています。ですから、長く残ってくれる人もいますし、そこまでの過程がたいへんで、担任の根気づよい関わりが必要だったんです。今は、親の会は、担任に何のかのと口を出されなくてもひとり立ちしています。新しい人は、前々の人の姿を見ながら見習っていくようですね。何年も続けるための、とにかく根気ですね。

司会：松戸では、最初は先生がリードしていた親の会でしたが、今は親の会が独り立ちしているというお話ですその根気はたいへんなものだったのでしょうね。

竹村：陳情の仕方も、市教委の立場をつぶさないように気をつけながらでした。

平岡：親の会は、教育委員会や行政の立場をやたらにやっつけることが活動ではないはずです。逆に、行政の方が、ことばのことで何が困っているのか聞くくらいの所もある。

丸山：そうなんですよ。教育委員会の方から資料をほしいからと言われたりすることもありますから。親の方が行政の人たちとうまく関わってくれれば、何でもできますよ。

斉藤み：ことばの教室があって、先生がいて、通ってくる子どもさんがいれば、そこに、親御さんがいて、子どもさんの担任がいて、というようにいろいろな人々との関わりが出来てきますね。ただ、通ってきている子どもさんと親御さんと関わっているだけでよいということはないことは、今までのお話でよくわかります。

ことばの担任として母学級の先生方ともいろいろと話し合いたいし、私が役に立つことがあればぜひ協力関係をつくりたいとも思うし、校内を見わたしただけで、私がやれることはたくさんあるように思えます。

親の会活動についてもそうです。母親教室で、じっくりと話し合いたいし、親の会のあり方についても考え合いたいし、ちょっと考えただけでも、たくさん思いうかびます。たくさんあるだけに、助け合う協力体制をつくりたいと思います。

思いはあるんですが、ひとりで教室を担当している所は子どもの指導で手いっぱいという状態だと思います。先生方が十分に研修できないまゝ毎日をすごしているんですから、気もちの中では、反省やあせりや不満が出てしまうのです。

司会：たしかに、先輩からいろいろと学んでそうすべきだとわかっていても、実現しにくい現場に、ひとりでいる先生方はたいへんですね。

盛：やはり、わたしたちの現場の人間に、問題を整理しながら情報を提供してくれる人というか、機関というか、そんな所がほしいですね。

私は、新卒で、この教育に入って二十三年になるんです。二十三年たっても、まだ、週一日は研修のために大学へ行かせてもらっていてまだ研修するんですか、と、よく言われました。以前のように、指導の技術が身につけばそれでいいのではなく、今は、スピーチだけでなくランゲージの問題にまで広がってきている時代になっているのですから、研修をやめるわけにはいきません。何しろ学問は日進月歩ですから。

私は、かつて、親の会の人から、研修で一日空けることを叱られたことがあります。研修の必要性を理解してもらうのに、上司だけではなく、親の会の人にも話して説明しなくちゃならなかったわけです。

内須川：研修はやっぱり欠くべからざることですよ。だから盛さんの場合は、斗いとってきたということなんだろうね。

盛：そうなんです。私は、この仕事をやめる二年前になったら研修に出かけることをやめるつもりです。二年位は研修しなくともなんとかなりますが。

親の会の大切さがわかっていても親たちに、私の考えていることをわかってもらわなければならないので、そんなことの話し合いをくりかえしくりかえし、くりかえしてくるうちに、だんだんとしんどくなります。

でも、かなりのエネルギーを親とのつきあいに使っているつもりです。なにしろ、子どものために共同戦線をはることがどうしても必要なんですから。

竹村：私の方から言えば、毎年同じことをくりかえし言っているみたいに思えてね。…　でも、相手は変わるので、やはり、あきてきてもやらなくちゃと自分に言い聞かせてね。これが根気ということばでいわれるのかなんて考えながら。

ひとりだと、ついくじけたり、もうやめておこうなんて積極的でなくなったり……。でも私たちは、何人も仲間がいましたから、市内で連絡をとり合っては続けてこられたんですよ。わかり合える人がいるとありがたいですからね。松戸では、親の会の人たちと先生とは、わかり合える関係が長い間かかってつくりあげられているんです。

金田：そうですね。今、先生がどんなことで困っているのかがわかってあげられる親の会に育っていないと先生の方もやりにくいでしょうし、心細いでしょうね。

笹原：そんな意味では、教室の先生方になにもかもまかせている親の会では、そんなムードというか関係は生まれないでしょうね。

ただ、どこまで親の会が口出しをしたらよいのかがむずかしいと思います。

平岡：いや、親の会ってのは、自分の子のためにならないことなら、先生にだって、教育委員会にだって言いに行っていいですよ。それが言えなければ親の会はないのも同然でしょう。親の会だから言わなくちゃいけないのだと思いますよ。

こんな例を、ある県で聞いたんですがね。ギョッとしたんですがね。よく、普通学級のＰＴＡのおかあさんたちが言うことばの中に、あの先生にものを言いたいけれど、子どもを人質にとられているから言えないということを聞くでしょう？

ところが親の会の集りに行った時に、それと同じセリフが出たんです。言語障害児を人質に取っている、そんな馬鹿なという感じで、びっくりしました。

もしそうだとしたら考えなければいけないですね。

親の会活動の母体—母親教室の機能

司会：母親教室は、心を通じあえるきっかけの場として必要なんですよね。

そうすると、親の会活動の基盤をつくる場は母親教室ともいえますかね。

平岡：そうなんです。だから、母親教室をやったり、学習会をきちんと続けている所は親の会も活動が活発だったりするんですよ。

つまり、親との関係がうまくいっている所、いい先生だと親の会もいいっていえると思うんですがねえ。先生が親を変えるっていうのか、先生の意気込みに親が変えられたっていうか。

先生方は親の指導という言い方をしていますけど、指導じゃなくて、親と一緒に考える会と思うんですけどね。その辺のところを分って欲しいな。親の会に親自身目を向けてくれるのに、三年から五年かかります。通級して来ました。明日から役員をやりますなんて先ずありません。

だから自分の子供が変化して来た。じゃ私も一つ困っている人の為に、何とかしてやろうという気持ね。総て金田さんとか、笹原さんとか斉藤さんとかが、皆二十年間も親の会に関わって来たという気持が今でも、人間は変らないではないかと思う。

私が親の会に入った時みたいに、脅迫したらどうでしょうかね。あんた親の会に入らなければ面倒を見ないよと。……（笑）

そのせいか二十何年やったでしょう。

斉藤：先生が親の会に入りなさいと勧め辛いみたいですね。

金田：先生の立場があるから言えないでしょうね。

竹村：任意加入になっているから。

平岡：親の指導をしっかりやっているところは全国でも少ないですね。子供の指導は良くやっているけど、親の指導というのはキャンプしかない。キャンプのいいのは、その場で親と先生が一緒になるでしょう、だからキャンプがはやっている。たった十回しかない補助事業のキャンプが奪い合いだものね。

今、親の会の勉強会や母親教室が、親の人間教育じゃなくて、障害に対する解説をする知識一辺倒になっているんじゃないの。

丸山：私、勉強会は、先生と親が対等に話をするということに努力するようにやっているんですが、できないですね。

平岡：私なんか永年やっているものですから先生と対等に口を聞かせて頂いているんですけど、お母さんにすれば、先生は雲の上の人のような感じで、いいたいことも言えないという雰囲気がかなり強いんですね。

それは自分達が苦労していないから、そういう立場にないというので遠慮しているみたいなところがあるんですよ。

始めから苦労している人はかなり、言いたいことも言えるんですけども、それをどうしょうかと思っています。

担任研修の重要性

盛：今まで、ずいぶんといろいろな話が出てきましたが、やはり、どうも、先生方の問題のような気がします。

内須川：そうだね。研修の問題だね。ただ子どもの指導をする技術を身につける研修じゃなくて、人間関係を学ばなければいけないんだと思うね。ありがたいことに、まだまだ日本では、ことばの教室で母親教室が開けるから、先生方は、その点に注意して研修をしていくべきだと思うね。

教室を増やしてくださいって要求してきて、たくさん増えたら、こんどは教員の質の低下が問題になってきているわけだ。でも、これは、はじめからわかっていたことなんだけれどね。

金田：やっぱり先生方、勉強してくださいって言わなくちゃいけませんね。（笑）

内須川：先生方の中に、親の会はいらないっていう人がいるなんて聞いたことがあるけれど、それは、その人は自分が研修していないことを表わしているようなものだね。

平岡：先生方が本心で、親の会なんかいらないって言っているのだろうかって疑ぐる時がありますね。

やっぱり、教育委員会や、校長先生の手前、なんとなく、私は親の会との関わりは全くありませんなんて、自分の護身上じゃないかなんて考えてしまいますよ。

司会：今まで、いろいろとお話いただいたことを整理してみますと、担任の側の方がどうも歩が悪いように思えます。ただ、この仕事に入ったきっかけなども関係あるでしょう。し、研修をきちんとした形で、まとめて受けられたかどうかにもよるでしょうし、事情はさまざまでしょう。

平岡：だから、人を得るということが大切なんですよ。やる気のある人をさがしてくるということでしょう。やる気のある人のやる気をなくさせないように、私たち親の会が見守って手伝けさせてもらうのが本当じゃないですか。

竹村：やる気のある人を見つけることは、教員の場合、校長であり、教育委員会だと思うんです。それと同じに、親の会のリーダーを見つけることは、教員の仕事だと思います。見つけるというよりは、三年も四年もかかって育てるということでしょうかね。

つまり、やる気のある人間同志の燃える火花がぶつかり合って、お互いを育てるということではないかと思うんですけれど。

司会：教員と親と立場はちがっても、同じ人間として、ひとりの子どものことをいっしょに考えていこうとする意気込みが、お互いに影響し合って、お互いが高められていく場をつくる心がまえが必要ということになりますか？。

平岡：そうだと思いますね。それが、親の会つくりの基盤となる信頼関係であり、それができる先生が親を育てていき、親の会活動を活発にしていくのでしょう。

はじめから、親の会つくりをしょうとするのではなく、信頼しあう人たちが、子どもたちのためにやるべきことを考え合う親の会つくりに気づいていく、ということなんでしょうね。

内須川：親の会としては子どものために、先生といっしょに、やれることをさぐっていく、その関係がお互いを高めていくという関係をつくっていく、ということでしょう。この点よくわかり合っているところは、外見からもよくやっているなと思えるところになるのでしょうよ。

今後への課題 ― 継承 ―

司会：この辺で、親の会ののぞましい姿を求めていく話し合いに入りたいと思います。

これから先、親の会活動をどう進めていったらよいのか、お考えを聞かせて下さい。

内須川：竹村先生のところはかなり関わりを持っているんですけど。松戸地区というなかなかいいところがあるんです。松戸市という形のなかで、ことばの教室が固まっているんです。そこで勉強会を開いていまして、僕は年に一辺そこに出させて貰って、研修をやるんです。それが段々引継がれている、ああいうことをやればかなりだしきれるのではないかという感じかする。

あまり拡がっても勉強ができないから、ある程度の広さで、何時でも研究会を自分達でやっていくという、その他に指導の先生を招いてやるというのも、中にいれていくというのも何か伝承するというのか、そういうものがないといけないと思う。

司会：そういう点千葉市でも十二、三年前からですか、市教委、が大変理解あって、精薄の担任の方は人数が多いから、担任を集めて講習会ができるんですけど、言語はせいぜい十何人でしょう。だから講習会ができないから、自分達で研修しなさいと言って、講師謝金を市教委が出してくれる。

それを全体で纏めて市教委が預っていて、どこの大学の先生を呼ぶから会場は何処ですというと、十日前に謝金が出てくるんですね。そういうシステムを作って下さったんです。

先生方のシステムも永年伝えられていって続いているものがあるわけですので、親の会も同じように考えてみたいですね。

斉藤：私は、全国の親の会の事務局をお手伝いしてみて感じることは、今、平岡さんがひとりで背負ってきていたんだなということがよくわかりました。二十年も、小林会長さんを助けて、実際は、ひとりで動きまわってきたことのたいへんさがよくわかります。

でも、このまゝじゃだめなのではないでしょうか、現に、平岡さんに倒れられたら開店休業になってしまうわけです。

まわりにいて、よくわかっていたつもりでも、実際には平岡さんの代わりとして動き回ることはできなかったわけです。

そんな意味で、まず引き継げる人を見つけることではないでしょうか。平岡さんひとりにやってもらって安心してはいけないんで分業というか、せめて役割分担をきちんとしないと永くは続けられないような気がしているのですが。

このことは、全国だけでなく、埼玉県としていえることなのです。

―一同　うんうんと　うなづく―

司会：そうですね。私なども、手伝う気はあっても実務が伴わなくて、ウロウロするばかりでした。それが逆に、平岡さんをイライラさせるわけです。

金田：やはり、地元のことも大事ですが、せめて事務局ぐらいはしっかりと結び合って仕事ができるように、役割をきちんときめたらどうですか。

平岡：関東の各県が事務局担当なのですが、やはり親の会がまとまってちゃんとやっているところは、いいみた

いです。

たえず、確認しなければ。事務局を分担していることを知らない会長さんも出てきていますからね。

組織固めの必要性

司会：そうすると、全国親の会の組織づけをきちんとすることが第一の仕事となるのでしょうか。

斉藤：それも大事なことの一つでしょうね。

どっちが先か、区別するというか、順番というのか、きめて言うことはむずかしいのですが、今、事務局を担当している各県の代表という立場の人が、それぞれの県の中で、どう全国を結びつけていくかということも大至急やりはじめなければならないことですよ。事務局を担当している人の後には、県単位の親の会組織があるということを確認していかないといけないと思うんですよ。

なんとなく、個人にまかされてしまうムードをこわしていくことだと思うのですが。

金田：私など、千葉で全国の手伝いをはじめ、今は神奈川県に属していない不鮮明なところにいるので、手伝いにくいのですが。

やる人がいなくて平岡さんがひとりで悪戦苦斗している姿を見ていると、居たたまれない気もちになってしまうんです。

司会：ありがたいことですね。今、金田さんのような方が何人かいらして。東京に親の会がないから属していないけれど、連絡係りをして下さったりして、ボランティアとして続けると言って下さる人も出ているんです。

県の代表ではないけれど、手伝っていただいているわけです。

内須川：親の会って、自分の子どもさんが幸せになるためにあるんでしょ。だから、自分の子どもさんは成人したからもう関係ないなんて言わずに、手伝って下さる気、まだ、十分に幸せになれていないお子さんのために、力を借してやろうという気もちがありがたいですね。

親の会活動の歴史から考えてみて、この問題を将来発展させる為には、三つの柱が必要であるということを物に書いたことがあるはずですが。

一つは現場の臨床。臨床をやる為には先生が必要なんで、先生というのはただ出てくるのではないから、その先生を養成する養成教育というのが、も一つある。

さらに、研究者を作るというのがあるだろうというので、研究と三つの柱を立てなければいかん。それが、巧くバランスが取れていかないと将来伸びないのではないかと頭で論理的に考えまして、それをしないといけないと言ったのがきっかけの趣旨なんですね。

実際の動きの中では、なかなかそのような形に行かなくて、現場の問題が最初に取り上げられ、それからかなり充実するに共なって教師の養成問題が取りあげられ、それも文部省の力で段々できてきた。

常々、研究を取り上げなければいけないと思っていたんですね。これは正直に言いますと正式に取り上げられたとは言えないかも知れません。まあ筑波大学に僅に心身障害学系というのが出きて、そこにドクターコースが出きたというのは細々と口が空いていると、いう程度のものではないかと思うんですが、そういう点では、そういう方面の充実みたいな物がやはり、流れていかないと先細りになっていくのではないか。

という様なことに繋がるわけです。繋るがなかなかその線が明確に出て来ない。かなり私の印象では田口先生の若いころ、僕等の若いころも、そういう一線を非常に強調して、その為に活動しようじゃないかということで、こういう風に先生と親しくなれたし、親の会のお母さん達と親しくなれたと思うんです、そういう意味では一つの子供の問題を皆でやっていこうじゃないかという、そういう情熱みたいなものがあるような感じがするんです、

今の先生の養成も機関がなかったわけですから、先生が自分で勉強するとなると、田口先生の教室に行ったり、神山先生のところ、あるいは学芸大学に来たりということで、勉強の行脚、武者修業をやった。あの当時の…、托鉢、意欲があった。

そのうち養成の学芸大学ができて、先生はそこに行ってやればいいんだという形が出てきた。

そして効果も若干見られるような時期がくるに連れて、問題が起った。例えば教師養成問題は数も増えてきたけれど問題が出てきたのではないか。それは言語障害の問題の前に、障害児教育の問題で、学級数もはるかに多いんですが、数が増えると質が落ちて、いろいろ困っている。これは何とかしなければいけないという声が聞かれていた。これはただ、知恵遅れの問題だけではない、やがて言語障害でも同じ問題が来るなと思っていたら、言語障害の一番大きな問題は教師の数は確に増えているけども、教師の情熱も落ちたし、質もガタ落ちという感じがするんですね。

大学では養成しなければいけない責任があって一生懸命やっているけど、大学の養成では追っつかないというのが実情だし、ところが現場の先生を派遣しなければいけない。教育委員会などは、そこに行けばいいだろうという考えになって、実質的にどれだけ力がついたかということよりも、そこに通わせるということを主眼にするようになった。

ところが通わせるんだって、それじゃ二年間通わせてくれますかというと、そんなところは殆どなくて、僅かに神奈川県があったけど、一年でもいい方、最近は半年、半年でもいい方で三ケ月なって、最近は研修も何もしないで先生になっているというのが実情でね。昔に比べると物の考えかたがどんどんお粗末になってしまった。

ところが実際は数が増えてきた。こういう矛盾が今出てきちゃってね、このまま行くとどうなっちゃうかなという感じになって、さっき、当初のころ研究者といわれる人も、現場の先生も、親御さん達も一生懸命に子供を何とかしようとしていた情熱が、段々ばらばらになったという感じを持っているんです。

この辺は何とかしなければならないという問題を感じている。

私は主として研究の方を何とかしたい、お粗末なんだけど少しでも道を開いていくことをしたいとそちらの方を進めているんですけどね、個人的には私の思うように

ならないことばかりでね、欲求不満ばかりですよ。非常に情けない状況なんです。

ただ有難いことが一つあるのは、そういう問題に大学が関与しているということが非常に大事なことで、大学のいいところというのは命がなかいところだと思う。

養成所というのは命が短かいんですね、小間切れですから、その場でやればいい。ところが、代々先輩後輩と繋がってきますから、つながりがあるというのは大学しかないんです。

そういう意味では僅に大学にとつかかりがあるというだけでも、まあ救われているんじゃないかと思うんで、それが何もないということじゃ、どうにもならない。

それで数的には拡充され設備も非常に良くなって、私も時々現場の先生の研修会に行きまして事例の検討会などやるんです、昨年できた学校にも行ってみたんですが、教室の設備が立派なんです。教室の設備が、新しく作る程、得だねと話した。入る機械も優秀な機械が入るしね、部屋も立派だし昔のことを考えると設備なんかでは、格段の相違になってきた。

ところがそういうものを十分に活用して活かして、いくかという問題になると、いろいろ問題が出てきて、言葉の先生というのは大変だと思うんですけど、また私ども研究者が勝手なことを言いますからね。もう少し技術的なレベルアップをしろなんて。実際問題としてはないし、そんなことはやっていられないというのは実情だと思うんで、そのなかでも必要を感じて何とかしなければと頑張っておられるでしょう。しかし、研修のチャンスは押えられてしまうと辛い問題が起ってくる。

その辺はただ先生の問題だけではなくて、時代の変化というか、物の考え方の変化というか、一般教育の変化というか、一般教育そのものがかなり変質していますね。

その変質してきていることが、障害児教育にマイナスであるということがあると思うんですけども、そんな難しい時代の動きの中でそういう変ったものが起って来たと思うんです。

数量的に拡充したということはいいことだと思うんだけど、これから二十年の問題を考えると、もう一度初心にかえるというか元のような、情熱を持って本当にいきいきとした教育を出きるようにしなければいけないんで、それをどういう風にして戻すかということがこれから大変なんじゃないかと思う。

ずいぶん長く話してしまいましたが、親の会を満足に

育てられない状況となってきていることが、教育現場の問題としてとらえられ先生方にも考えてほしいと思うんですよ。

だから、先生が研修をするのに押えられがちで困っていることを親の会からも応援してやって、もっと良い先生になれるように運動してほしいですね。

斉藤：先生の質を低下させないようにしていくのも親の会活動ですね。

先生方が困っていることの一つに、研修を希望してもかなえられないということがあることは確かですからね。

笹原：群馬は、先生方の研修は桃井小学校が中心になって定期的にきちんとされているようです。ですから、研修で困っているとは思っても見なかったのですが。

たしかに、長期にわたって大学へ研修に行くということはないようです。先輩の先生が後輩の先生方のリーダーとなって教えていっているのだろうと思っていましたが、それでいいと済ませていた研修のし方をまた見直して見る必要があるのでしょうか。

金田：先生方の研修とか養成の問題を一つとりあげても、県ごとに、それぞれのやり方で済ませていましたね。てんでんばらばらなんですね。

そうすると、予算の都合ですぐ変更されたり、行政に当る人の考え方でいくらでも変えられるわけですね。

そんなことが、ここ十年来続いてきたので現在の問題が起ってきたのでしょうね。

さっき、松戸の例が話されましたけれど、のぞましい姿が出来上るまで、くりかえしくりかえし同じ事をお願いして、先生方の研修が先細りにならないように応援しなければならなかったわけですね。

就労問題（取り組むべき問題）

平岡：うちの息子の場合もそうだったのですが、子どもが大きくなって、なんとか進学してほっとしても、すぐ就職の問題にぶつかり、やっと就職口が見つかっても、親にすれば人並みに結婚もしてほしいというように、口蓋裂のお子さんも場合によっては、うちと同じように困ることもあるようです。

ですから、進学や就職の道を親としては、つけておいてやりたいと思うんです。このことも個人の力ではとてもたいへんなことで、特に就職は企業への働きかけはやはり親の会として運動した方が、大きな力になるのではないかと思います。

就労の問題は、お子さんが小さいときは、他人のこととして済ましてしまいますが、やはり、いつかは、わが子も通らなければならない道ですから、いっしょに考えてほしいですね。

今、ちえおくれや自閉症の親たちが成人になったわが子の授産のことで困っているところがたくさんあるようです。

そのために、自分たちでお金を出し合って訓練所をつくろうとしているという話をよく聞きます。資金づくりを親の会の大きな運動の目標にしていろいろと動いている所の話を聞くのですが、私たちの場合も少しちがった内容ですが、就労を考えてやりたいと思うんです。

斉藤：そうですね。親の会に最初から関わってきた人たちの子どもさんは、もう、社会人になっているのでしょう。その年頃の子どもさんはすぐ、結婚の問題も起るでしょうし。現在、親の会が就職のために動いてやったり、結婚相手を探してやったりしてはいませんが、ごく普通に、就職できたり、結婚相手が見つかるという世の中になってほしいという願いは皆、持っているのではないでしょうか。

そうすると、かつて言語障害をもっていた子が、その問題を解決したあとは、ごく普通に社会の中で生きていかれるように、偏見や差別がなくなるまで世の中へ働きかけていかなければならないのでしょうね。

広い世間を相手にしていくと考えると、とてもひとりじゃ出来ませんし、気が遠くなるような感じです。

金田：だから、会員として励まし合って、がんばらないといけないんでしょうね。

私など、子どもが大きくなって、どうやら人並みに大学にも入れたし、今、一安心の状態にいると、社会に向っていろいろとものを言うことがしんどくなりますが、やはり、原点にかえってというか、初心にかえるというか、思いを新たにしていかなければいけないのだなあとしみじみ思いますよ。

就職の問題にしても、すぐやってくることですが、先輩の方々から就職についてのアドバイスが気軽に聞けたらありがたいですからね。

親の会として、就職についての情報を集めたり、それを整理して伝えたり、啓蒙の仕方も、成功している例をたくさん集めてみるということもしたらどうでしょうか。

全国親の会として情報を集め、それが伝えられるよう

にしておけるしくみをつくりたいものですね。
まあ、それには、会報がとても役に立つと思いますが。
こんなことを考えると、やはり、人手とお金がほしいですねえ。
平岡：そうなると、どうやってお金を集めるかですよ。人手だって思うようには集まらないものですからね。

各県組織の見直しを

司会：となると、どうどうめぐりで、また話が前にもどりそうですね。
いつでしたか、北海道の土谷会長さんと話したことですが、一度、きちんとした形で、問題を整理することをしていかないと駄目じゃないかということが出ました。
全国には、経験の長い先生がたくさんおいでだし、親の会を育て、守ってきた所は結構あるはずということから、そんな先生方や親の会の役員さんたちに、何が問題なのか聞く機会をもったらどうだろうという意見が出ました。
たしかに、県それぞれがいろいろな事情で問題のない県はないくらいに、たいへんなんですから、各県の問題を整理してみて、全国的な立場での運動へとつなげたらどうか。今そんなことをするチャンスではないか、という話をしました。
先程、内須川先生のおっしゃったように、親の会の活動のスローガンを検討して、現実との差がどうなのか評価してみることも必要だと思いますが、どうでしょうか。
平岡：たしかに、どの県も何にも問題はありませんというところはないでしょう。しかし、各県が全部、全国につながっているのではなくて、会長会議にだって出てこないし、会報やパンフレットも協力してくれない状態の県とのつながりは、考えただけでも、むずかしいなと思います。
今まで、私が元気な時には、出来るだけこちらから出かけて行って、顔なじみになるようにして来ました。この目で県の様子を見たり聞いたりして来ました。でも、しばらくは中止していかなければならないでしょうからつながりがとりにくいのです。私の方が出られないなら、出かけて来ようなんて所は、一つか二つですからね。
どの県も、全国の立場と同じに、資金がなくての活動なのでむずかしいですね。
金田：そうすると、まず、各県の体制をととのえていくことが第一になるわけですね。
平岡：私はそう思いますよ。
斉藤：埼玉の場合、私のあとに続く人を育てるということが第一になりますね。まあ、埼玉に限らずいろいろな県でもそうなるのでしょうが。県内のある市ではよくまとまって活発にやっている所があるけれど、まだ全然、ことばの教室がないので親の会もない所があり、といった具合で、県全体としてまとまることのたいへんさを思うと気が重くなります。私の努力が足りないということになるでしょうが、仕事をしなくてはならないし、合間にやる親の会は片手間となり、ついつい……という…それをどうやって、育てたり、まとめたりしていくかです
時間もほしいし、資金もほしいし、人もほしいということです。
県がこうで、全国は平岡さんという親の会が第一の人がひとりでというところにもズレが出て来てしまうのです。
平岡さんには申しわけないなと思いながら事務局会議に出て来たり、会長会議のお手伝い位しか出来ないのです。
でも、今までのお話から、私の場合は、とにかく、自分の県をまとめていくことです。親の会の存在を地域の中で、他団体に知ってもらい協同体制をつくることをしていこうと思います。自分の県がきちんと形づくられて何人かのお仲間がいるようにしないといけないと思うので、その点をがんばってみましょう。
笹原：私も何年も経つので、今のおかあさんたちと少しズレを感じていました。私の所は教室の先生方がいろいろとリードしてくれるし、気もちよく応援したりしてくれますから若いおかあさんたちに本当に、わかってもらっていっしょに活動してもらえるように、私たち親の会の役員もがんばるし、先生方にも若いおかあさんたちの指導を、少し、きめ細かくやってもらうよう話してみましょう。
すぐに効果は出ないでしょうが、あきらめてしまわずに、少しずつやってみます。
竹村：松戸だって、新しい会員は、市のチャリティ販売の時、親の会のおそろいの割烹着を着ることに、とても抵抗があるようでねえ。着なくちゃいけませんかなんて聞いていた人が、先輩の会員が見栄も外聞もなく、大きな声で売っている姿を見て、次の年には、いつの間にか、自分も大きい声を出して売るようになるんです。

だから、親の会のことは、はじめからはよくわかるはずもないんですから、とにかく、仲間に入ってもらうようにすすめることですよ。それがあとあとに伝えられていって会の活動もしっかりしたものになっていくんですよ。はじめのうちは、先生と役員がリードしていくことでしょうね。

それから、県へつながっていくようにしていけばいいわけですから。

全国親の会とのつながり

平岡：全国親の会の存在ってなんだって、ときどき聞かれるんですが、今のところは、中央行政の動きや各団体の様子を知らせたり、補助事業の割りあてをして、各県の行事の手助けをするぐらいだと思うんです。

ただ、それを知らせるのは、会報とか、会長会議という機会しかないのですが、その会報すら、いらないなんてところがあってがっかりするんですが。

もし、補助事業の制限や打切りが出てきたら、キャンプなんかは全部、親の自己負担になりたいへんなんで、減らされないように、実績をきちんとあげていくように、ってたいへんなんですよ。

キャンプなどの補助事業は、ほしい県はいくらでもあり、ひっぱりだこなんです。

キャンプで全国とつながっているだけだっていいんじゃないかなんて思うことがありますよ。

でも、ふだんから、よく連絡をとってくれるところは親しくなって割り当ての仕方も他とちがってくるといけないなと思ってはいますがね。

質を高める努力を

内須川：現在は、やはり、各地区の親の会がどうしてつくられてきたのか、若い先生方と若い会員に伝える仕事をしていかなければいけない時でしょうから、斉藤さんや笹原さんや平岡さんは、二十年やってきたからなんて理由で手をひかないことです。

今まで一生けんめいやってくださったけれど、まだしつくしてはいない状態だと思ってもう少しがんばってほしいですね。

各県の役員さんも十年、二十年と続けている人がいてくれるという話のようですが、やはり、あとの人たちに

伝えていくことは、もう少し続けてほしいですね。

松戸のように、親の会のことはよくわからないけれど、先輩の人たちの活動や先生の動き方を見ているうちに、自分もいっしょに動くようになり、動いているうちにわかってくるものだと思うんだがね。

開拓時代は終って、これからは、つくったものをより確からものにしていかなければならないと思うんですが、教師も親も質を高めるために、お互いに研修していってほしいですね。

研修ってのは、ただ技術的なことじゃないことをはっきりさせることでしょうよ。

みがき合う関係

司会：ずいぶん長い時間いろいろなお考えを聞かせていただきましたけれど、どうも、この方法がいいというきめ手はなかなか出てはきませんでした。

でも、今の内須川先生のお話のように、親も教師も、研修をしていくことが大切だなあと思いました。

教師が、親の上の位置にいて指導することもあるのでしょうが、お互いが影響し合うこともあるのでしょうね。お互いに影響し合うことが研修とか学習といえるものになるのでしょうか。

盛：たしかに、長いこと続けてきた私ですが大学で研修させてもらって、知識を授けてもらうことと同時に、おかあさんから、どれだけ助けてもらったことか。大学の研修とはちがった学び合いがあったように思います。私自身、二十年前の私と今はちがうはずです。もし、変らなかったら、なさけないですが。おかあさんたちに変えてもらったとも言えるかも知れません。

親の考え方や態度が悪いとせめるだけでなく、教師である私が親や子どもから学ぶことなのかなと思うんです。

竹村：おかあさんにしてみれば、自分の子のためにということですし、担任にしてみれば自分が担当した子をよりよく指導していくためにということで、お互いが、もっとよりよく出来ることはないかを探しながら努力する態度をもつことで、お互いに高まっていくわけでしょう？

ですから、一ばん基本的なことだと思うし、当り前のことですよね。

これで出来て、親の会活動の基礎の、教師と親との本当の提携というか、協力というか心の通い合いが出来るのでしょうね。

わかりきっていることですが、その辺から自分のやり方をふりかえってみることから始めたらどうですか。

親の会活動のあり方を求めて

司会・過去二十年余りの親の会は、小学校や中学校に設置されていることばの教室にあって育ててもらってきました。

全国どの県にも、親の会組織はつくられています。全国の傘下に入らない県は二県だけですが、あとはみんなあります。ここまで広めてくれた先生方や役員さんに感謝しなければいけないわけです。

しかし、教育に対する考え方が変化しつつある時代になってきているというお話を伺って、ますます、これからの親の会は、どういう方向にむけばいいのか考える必要があると思えてきました。

実は、千葉県の銚子市の例なのですが、もともと三十九年から全国のトップをきって、精神衛生を宣言した土地柄もあるのでしょうが、ことばの教室を一つの学校へ作ってしまうと、学校だけが背負い込むことになり医療と教育が結びつきにくいということを考えて、市教委の隣りに教室をつくったということを聞かされました。当時、精薄学級の担任が、市長さんや教育長さんに折にふれて、話してくれていたというのです。

教室をつくるまでに、何年間かかってムードつくりをしてきたというのです。教員を研修に出し、施設をつくってという間に、教育委員会や校長先生方や地域社会に理解を求める活動を親の会が陰に陽に動いたそうです。このように、こつこつと必要感をもった親の会が動いてきた所が、はじめの精神を今に伝えているのではないかと聞きました。

そして、現在は、この教育をはじめたら長いこと続けていく人を探しているということでした。とにかく、やる気のある教育を探すことに市教委は力を入れているといいます。

元教育長さんは、親の会との夜のつき合いの中から、いろいろと教えられたということで、昼より夜の方が忙がしかったという話でした。　―笑―

平岡・たしかに、年に一回や二回顔を合せるだけでは、人の考え方がよくわかったとはいえませんね。

昼に限らず、夜だって、会う時間をとってもらって、

ということをよくやりましたよ。

理解してもらいたい人をその気にさせることは、たいへんですよ。

司会・実は、一九七二年の全国代表者会議の記念講演として、内須川先生が、「親の会の役割」について話されている会報を見つけました。二十二号です。

その中で、言語障害児に対しての基本的で総合的な対策を作らなければならないのですが、各関係省庁が連絡をとって実施することがむずかしいことをおっしゃっています。日本の組織の問題にぶつかるということです。まず不可能に近いのなら、現在の規定や法律の中で工夫をしてみることが必要だと言われています。

今から十三年も以前のことですが、現在もこのことは同じだと思います。

先生は、現状で改善すべきものがあるとすれば、どのようなものがあり、それをどのような形で改善すればよいか……このことが、当面、私たちが問題にしなければならないことだとおっしゃっています。

これが、親の会の、何をしたらよいかということになると話されています。

平岡・親の会の基本的な姿勢は、その考え方であると思うのですが……。

内須川・子どもの側から問題解決をしていくことのむずかしさは、十三年前も今もあまり変わりはないといえましょうね。

子どもなり、言語障害をもっている者の側から考えるべきことが、年令とか、義務教育とか管割とかに分断して考えることはおかしな考え方と思わなければいけないですよ。幼児、学童、中学生、高校、大学生というように、全部含めて考えてゆくのが当り前なのです。

この点、十三年経ってどれだけ変ったのでしょうね。

子どもの発達とか障害というものか一体どういうものであるのかを親の会の会員もよく知って、広がりの輪を作ってゆくことです。

例えば…ことばの問題について一般の担任の先生はどのくらいの知識をもっているだろうか、障害児をもつ親ですら何年も、ことばの教室の先生とつき合ってやっと分ってくるのですから、一般の人であれば、なおさら知らなくても当然なんでしょう。

啓蒙という仕事を一つとりあげて考えてみても、NHKの番組がやってくれるだけでは不十分で、本当に啓蒙がゆき渡るためには、「口コミ」で、当時者が、自分の

口を通じて堅実に広げることだと思いますが。

＜ここで、編者の一存で、二十二号よりの抜すいを入れさせていただきます。内須川先生の講演の中からです＞

前略

○例えば、財団の事務室の件ですが、言語障害の親の会には専従者がいない。これは事実です。これを、どのように解釈するか、

心身障害児をもつ親の会はさまざまありますが、この中に言語障害児より数の少ない、会があるはずです。数の上から申しますと、言語障害児をもつ親の会は多い方だと思います。なぜメンバーを多くもつ会に専従者をもっていないのか、それは、会を構成する一人、一人が自立していないのではないかと思うのです。

では、なぜ、自立できないか、　　中略

○一つには、ことばが全くよくなってしまって、普通の子どもになり得ることです。言語障害の問題というのは、そういうことを含んだ障害なのです。

中略

○言語障害児のための教育なり、福祉というものが、すすむためには、親の会だけではどうにもなりません。先生の力でも、どうにもなりません。それでは何とするか。それは、一般住民の力です。この力が結集されて、はじめて不可能だと思われた問題にとり組むことができるように思われます。

これは、国の組織そのものを変えるというような重要な問題に立向うのには親の会という小さな力ではどうにもなりません。担当の先生の力でもどうにもならないし、広げられた総体の力によってはじめて可能になると思います。

○それでは、住民に対する啓蒙が本当にできるようになるのには、どうならなければならないかといいますと、それは、それぞれの立場、例えば、親の会もその中に含まれますが、担当の先生もそうです。それから私のような障害に関する研究者もその中に含まれなければいけないと思いますが、このように違った立場にいる者も、みんな同じ問題をもっているわけです。障害児にかかわるという点において、本当の意味の連帯ができて、はじめて、可能になることだと思われます。

中略

○そこでまず、私は、みなさんに、真の意味の自立は何かと訴えたいと思う。

まず第一は、親が自分の子どもに問題を感じている限り活動をしていて、問題がなくなったからといって、活動をとどめてしまう結果がもし、仮りにあったとしたら、これは、真の意味で自立にふさわしい態度ではないと思います。

中略

○三つの柱が絶体に必要だと思います。第一は治療と指導です。治療教育の中で、活動されている、まさにそれです。あるいは病院でこのような活動が行なわれている。これもその通りです。治療教育を担当する方がその面の教育を受けなければならない。つまり養成の問題だと言いかえることができます。これは担当の先生というごくせまい意味だけではありません。親自身の問題、つまり教育であります。

○第三の柱は、これは、極めて、隠された柱でありまして、これが今迄は表面だって考えられたことはないのです。研究という柱です。私はこれまで親の会のスローガンというものを折にふれて、みてまいりましたが、最初のスローガンは、もっとも原始的なもので、治療教室をふやせというものです。しかし、教室をふやしても、どうにもならないということになって、その次は、教室に来てくださる先生をふやして下さいということになり、次に先生を養成してほしいと訴えられています。しかし、その先生を養成するためには何が必要かということは、あまり考えられていないようにみうけられます。

治療教室の先生は、一、二年たてば、ヒョッコリできてくるものではありません。それには、長い間、勉強を続けなければいけないのですが、その勉強を指導してくれる先生は誰か。このことを考えれば、研究者の養成というものが必須の事項ということになります。その重要な問題がどこまでもとりあげられていないようです。まして国がそのようなことを考えていないのです。一つの大きな建築を完成するためには、土台が必要です。土台がしっかりしていればいる程、そこに立つものはしっかりしたものが立つのです。いまは（編者注…一九七二年現在）無縁のもののようですが、これがやがて直接的に重要なものとなるのです。

中略

○現在、私が危惧を感じているものがあります。例えば、文部省の管轄下においては、東京学芸大学、宮城教育大学に四年コースの養成課程ができた。さらに、愛媛大学、金沢大学、北海道大学に一年制現職教員の言障課程ができた。非常に結構なことです。しかし、このようなものができても、では、誰が、そこで先生の養成をするのかという問題を考えてみますと、必ずしも結構なことではないのです。現に、私も、あるいは東京にいらっしゃる田口先生、その他の先生も集中講義で金沢にゆき、愛媛にゆきで、全国をまたにかけて歩いています。これは、どういうことを意味しているか決して好ましいことではないのです。その地域に、それを研究する人がいれば、私たちが出張してゆく必要はないのです。ところが、人がいないのです。したがって、あっちこっちと出歩いているわけです。こういうことで本当の養成が出来るでしょうか。専門家といわれる人が養成できるでしょうか。このことをきびしく反省してみる必要があると思います。

○文部省・厚生省バラバラの行政

このように考えてみますと、まず養成の中にもいろいろ問題があることが解ります。例えば、厚生省のはらではどうしているかということです。実は、昨年から厚生省の管轄で、国立聴力障害センターにおいて、聴覚・言語障害の専門職員の養成所というものができて、そこで一年コースの養成がはじまっているのです。文部省と厚生省は無縁なのです。

○では、このようなことを進めていくと将来どのようなことが予想されるか考えてみますと、教育畑で言語障害を担当する人と、福祉で、病院の中で働いている厚生省管轄下の先生が全然関係ない形で、できあがってしまう可能性が考えられます。

○その中で活動している私達は、少しでも広い立場でものを考えていかなければいけないのではないかと思うのです。このようなことがお互いに反省されて、力を合わせたときに、正しい一つの治療教育ということが完成されるのではないかと考えます。

○治療と指導という柱と、養成、教育の柱と、研究という三つの柱が、バランスをくずしたらば問題が起きてくると感じているのです。三つがお互いに並行して進行したとき、はじめて言語障害の問題が開かれていくことをのべたいのです。

○親の会は大きな力をもっている

さて、そういう大きな立場で考えていただきまして、その中で親の会は、何をやることができるか考えていただきたい。親の会は力をもっていると思います。これは、現場の先生は痛切に感じていることではないでしょうか。

○言語障害児をもつ親の真実の声であるということです

これが反響して一般住民の間に浸透したとき、これが本当の力になるのではなかろうかと思います。現場の治療教室の先生がいかに抵抗し、いかに力をふるっても、その力は簡単に押えつけられてしまうのです。しかし親の会はそうではありません。

以上

＜少し長い抜すいになりましたが、今から十三年前に、現在起るべき問題が指摘されています。この点をお考えになってみて下さい。

なお、二十四号（一九七三年）では、〝親の会をどう考えるか〟というテーマで関東一円の人々で座談会し、その記事が掲載されています。

さらに、四十二号（一九七六年）に、岐阜大学教育学部の柚木馥先生によって〝親の会の充実のために〟という文が巻頭に載せられています。

そして、〝母親教室と親の会〟の文が四十四号に、というように、くりかえし、くりかえし問題としてとりあげられてきています。

六十九号あたりから、〝親の会は原点にかえれ〟という巻頭言が見られてきました。お茶の水女子大学の田口恒夫先生はじめ、東京学芸大学の小川仁先生や多くの研究者の方々からのご講演もいただいております。内須川先生のおっしゃるように、スローガンからの見直しも方向性がつかみやすいかも知れません。＞

平岡：先生方から、いつも言われてきたことに、各県、各地域がしっかりと結びつくことが基盤とならないと、全国的な立場で、文部省や福祉関係の厚生省や労働省などへの働きかけをしていく大きな力とはならないのでないかと思うんです。

親の会が自立せよということは、先生と仲良くするなということではなく、ひとりひとりの会員が、自分で考える力をつけることだと思いますがね。

司会・今まで、親の会の歴史をふりかえってみて、そこをスタートとして、現在の問題点の見直しをしてみました。

ここ、十数年来、親の会活動はこれでいいのかとたえず反省され、問題点が指摘されてきました。

これというきめ手がないことは、当然だと思いますが、折にふれて、原点を見つめ直すことが大切なのでしょうか。

本日も長時間のご検討ありがとうございました。神山先生と内須川先生もご多忙のところであり、しかも遠方からのご参加、ありがとうございました。どうか、これからも、時々はご叱責くださいましてご指導願いたいと存じます。

皆さん、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

編著者　神山五郎氏　略歴

清恵会医療専門学院院長

昭和六十年二月二十日発行
編著者　神　山　五　郎
発行所　全国心身障害児福祉財団
〒162　東京都新宿区西早稲田二—二—八
電話　二〇三—一二一一
発行人　太　宰　博　邦
全国言語障害児をもつ親の会事務局
全国心身障害児福祉財団
〒162　東京都新宿区西早稲田二—二—八
電話　二〇三—一二一一